

し、術後7カ月頃より表情運動の回復が得られ始めた。本法は側頭骨内の複雑な操作を必要とせず、比較的簡便に施行でき、又文献上の成績も良好で、外傷に限らず聴神経腫瘍術後にも積極的に試みるべき方法と考えられる。

22) 外傷性浅側頭動脈瘤の6症例

天笠 雅春・小沼 武英 (仙台市立病院 脳神経外科)  
 村石 健治・高橋 明 (東北大学脳研 脳神経外科)  
 鈴木 二郎  
 桜井 芳明 (国立仙台病院 脳卒中センター)

浅側頭動脈に発生する外傷性動脈瘤は比較的小さいものであり文献的に150例程度の報告がある。我々はこれまでに6例の外傷性浅側頭動脈瘤を経験しているので報告する。症例は全例男性で外傷は自動車の交通事故3例、自転車の転倒1例、ケンカ1例、木材による打撲1例であった。CTで脳挫傷を伴う意識30の1例を除く5例で受傷時の意識は0で症状も軽微であった。受傷部位は全例前頭部、側頭部を強く打撲していた。同部の裂傷を伴うものが1例であった。症状は全例前頭部～側頭部の拍動性腫瘍およびそれに伴う頭痛であり、外傷後2週間～2カ月の間に発症している。動脈瘤の発生部位は浅側頭動脈の前頭枝3例、頭頂枝1例、前頭枝と頭頂枝の分岐部2例であった。手術はresectionを4例に行なった。最近の2例についてはestrogenによるchemical embolizationをおこなった。1例はそのまま治癒し、1例は動脈瘤近傍にガラス片を認めたため血栓化後動脈瘤を摘出した。結果は全例良好であった。外傷性浅側頭動脈瘤の臨床像および治療について述べる。

23) 高齢者の慢性硬膜下血腫

青樹 毅・高橋 功 (国立療養所 北海道第一病院 脳神経外科)  
 竹田 誠・小柳 泉  
 上野 一義

従来高齢者の慢性硬膜下血腫(CSH)は脳萎縮のため術後脳の盛り上がりは遅く、また血腫量も比較的多く再発例の報告もみられる。

今回我々は過去6年間に手術を施行した7例の80歳以上のCSHにつき臨床的検討を加えたい。

対象は80歳から85歳(平均82.1歳)の男性6例、女性1例である。術式は穿頭術による血腫吸引術を施行し、術中に腰椎クモ膜下腔へのリングル注入を併用した。80歳以上の高齢にもかかわらず、この手術の工夫により残存血腫量は少なく再手術することなく意識障害、運動障害等の症状を残すことなしに全例独歩退院した。

24) 巨大な石灰化慢性硬膜下血腫の1例

丹羽 潤・藤重 正人 (札幌医科大学 脳神経外科)  
 平野 亮・中村 和夫  
 田辺 純嘉・端

一部の慢性硬膜下血腫では血腫および被膜が広範に石灰化することがある。しかし手術的にこれらを摘出することが困難であったり、また下部脳組織の萎縮が著しいことが多いなどの理由で、神経症状が進行性である場合を除いては手術が行われないことが多い。偶然に発見された石灰化慢性硬膜下血腫の例で、CTスキャン上mass effectが著明であるため手術を行った。石灰化部分の摘出操作に工夫を要したので、考察を含め報告する。

症例：24歳、男性。神経学的異常所見なし。CTスキャンで左頭頂葉に広範に石灰化した慢性硬膜下血腫を認めた。手術を行ったところ、外膜の下に粘土様の血腫と石炭様の血腫を認めたが、さらに内膜を含め血腫の一部も石灰化していた。石灰化部分はダイヤモンドドリルを用いて、脳の拍動が出現するまで丁寧に削除した。この操作によって術中脳組織が2cmほど盛り上がりつつのが認められた。

25) 慢性硬膜下血腫術後再出血例の検討

関 薫・金子 伸司 (岩手県立胆沢病院 脳神経外科)  
 大和田健司

慢性硬膜下血腫は血腫洗浄術により、容易に治癒される疾患であるが、まれに術後、血腫の再貯留を認めることがある。そこで、今回我々は、慢性硬膜下血腫手術例のうち、再出血を来した症例について検討を行ったので報告する。

CT導入以後の過去9年間に当科にて手術を行った慢性硬膜下血腫は78例あり、このうち、術後再出血を認めたのは、7例(9.0%)であった。全78例の内訳は、男67例、女11例、年齢は11才から83才、平均63.5才であったのに対し、再出血を来した7例は、全例男であったが、年齢は48才から76才、平均62才と大差なかった。また、外傷の既往は、再出血例7例中5例(71.4%)に認められたが、全体の78例中62例(79.5%)と有意の差は認められず、外傷から手術までの期間も、再発例で平均73日、全体では平均65日であった。また、CT所見では、再発を来した7例の全てがDiffuse high densityまたはHigh densityを含むNiveauを形成したものであり、被膜腔内への出血早期における手術例で再出血を来しやすいことが、推察された。